

ヘーゲルと空海

東洋と西洋哲学比較研究

池端 秀雄

一 東洋と西洋の行的哲学体系

空海とヘーゲルの両哲学を比較するねらいは、認識方法が類似しており、共通な思想体系と、それぞれの民族の理念を内に秘めながら、東洋と西洋の古典に残る伝統的形而上学を原点にした行的哲学体系の形成を説明することである。

空海はヘーゲルにさかのぼること約十世紀、八三〇年（天長七年）に主著である『秘密曼荼羅十住心論』十巻、『秘蔵宝論』三巻を時の朝廷に撰しているが、ヘーゲルは、一八〇六年（文化三年）に『精神現象学』を著し、一八一七年（文化十四年）には『哲学的諸学問のエンチクロペディー』(Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften)を公刊してゐる。両哲学は東洋と西洋との相違、歴史的背景や事情が異なり、また千年以上の年

代差があつても、その哲学思想を比較して、共通な認識方法が見られるのは興味あることである。空海は、ヘーゲル哲学体系以上に形而上学的であり、西洋的認識方法による哲学体系に類似したといへば過言であるが、ヘーゲル哲学とは身近な感じがする。かえつて、ヘーゲル哲学の統一された体系哲学が、東洋的であるといわれており、後世のヘーゲル学派や研究者達は、このことを批判し、指摘している。

かくして、この東西相矛盾する哲学として、その根源的類似と相違がどこにあるのか、ヘーゲル自身、『論理学』の中で、東洋哲学徒である仏教徒は無を原理としており、ギリシヤのエレア派は有を絶対的存在としてゐるとのべているが、ヘーゲルはインド形而上学の影響を受けたかどうかは、私の研究不足で論拠を言うことができないが、ただ何らが、東洋思想に関係はないとは断定で

きない。寧ろ東洋的であり、弁証法的認識方法はそれであると思ふ。In orientalischen Systemen, wesentlich im Buddhismus, ist bekanntlich das Nichts, das Leere, das absolute Prinzip, der Triebnige Heraklit hob gegen jene einfache und einseitige Abstraktion den höheren totalen Begriff des Werdens hervor und sagte: das Sein ist so wenig als das Nichts oder auch: Alles fließt heißt: Alles ist Werden. 日本に於けるヘーゲル哲学研究で著名な業績を残された哲学者、西田幾多郎、紀平正美、田辺元、三枝博音、小山朝絵の秀れた研究論文には、ヘーゲル哲学と東洋思想の比較研究や大乘仏教思想との共通理念を随所に指摘されておられる。このようなことは明治以来我が国に西洋啓蒙思想が比較的容易に定着し、日本の近代思想を促進するに役立った要因かも知れない。特に、難解なドイツ理想主義哲学、即ちヘーゲル哲学を理解するに身近かなものとし、大乘仏教論理や東洋の世界観、宇宙観の共通な哲学体系として西洋哲学を理解している。

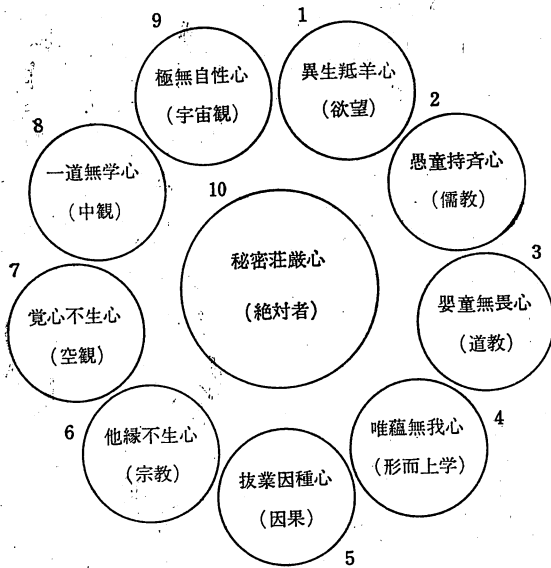
ヘーゲル哲学研究の先達者、紀平正美は明治四十一年に「日本精神とヘーゲルの弁証法」の中で「儒教の自然主義が、即ち弁証法的である」と云うのが、一層正しかろう。若しそれインドに其の端を発し、其の内の内なるものへと還帰し、儒教的の生活内容を其れに取り入れて完成せられた禅の公案が、全く弁証法によるものであることは明白である。而て若し此れを理論として取扱う限り

に於てならば、真如縁起から法界縁起に迄到達した華嚴天台の學問は最もヘーゲルに近よる。更に、「日本精神の直臣靈即ちプラトンのイデア哲学精神、宗教的に云う愛慈というものを根本に置き得たか、止揚契機としての清明心、即ち理屈抜ききの神ながらの行を把握し得たか、又それを運用するに」と日本思想にも西洋哲学の認識や論理が存在していることを強調している。

私はこの日本思想の源流を追求し、「日本的形而上学が存在するのか、それが如何に可能であるか」と従来の日本哲学不在といわれている課題にとり組んで見た。そこには歴然として、空海の密教哲学が本質的思想の源流として存在している。

三枝博音は「日本自然哲学の發生」と題して空海の独創的思想体系を次のように評価している。「空海の如き独創的な天才を得て、自然哲学思想の擡頭を見たのであるが、その後継者が現われないで、自然物（身体も真言の印契の諸事もすべて自然物であり専らこれにつながるものである）への直接的関心のみ溺没したのである。この私の日本人の一特質観よりしても、日本の密教の日本的なものへの歴史的形成への寄与は一つの文化史の問題である。」空海の自然哲学はまさに西洋の古代ギリシャのアリストテレスの形而上学に匹敵し、空海自らは『顕密二教論』の中で思想的系統をインドの大乘仏教の完成者、龍樹(Nagarjuna)の思想的継承者であることを自負している。従つて龍樹は東洋のアリストテレス的存在とも考えられる。ヘーゲルにとってはアリストテレスは、

空海の自負している龍樹との関係に共通しているが、ヘーゲルは『大論理学』の中で論理的思惟の必然的諸形式及び独自の諸規定を統一する原理をアリストテレスより継承したとのべており、さらに二千年以来の精神の労作の進展に高い意識をあたえたことを強調している点など、空海と同じく東洋と西洋の古典哲学の完成

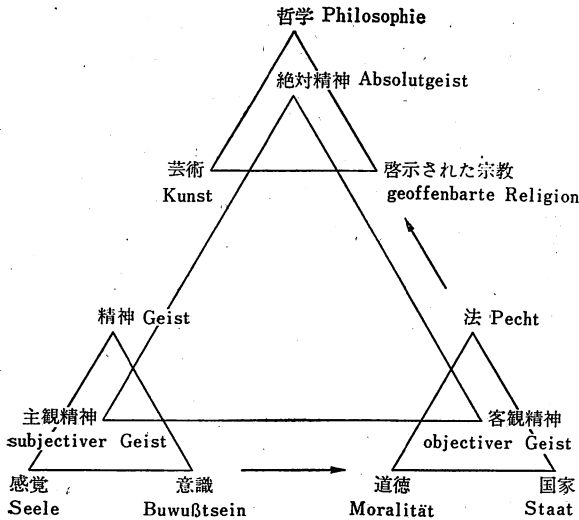


空海「十住心論」

者を自認していることになる。

二 曼荼羅と絶対者

ヘーゲルは一八〇六年に『精神現象論』(Phänomenologie des Geistes)を出版する。イェナがフランス軍に占領され、査察騎行



ヘーゲル「精神現象論」

するナポレオンを見て、世界を支配する個人、世界精神を見たとして手紙を書く、その夜半砲火を遠望しながら「精神現象学序論」を脱稿したという逸話が残っているが、「絶対者は精神である」この精神は世界精神に外ならず、有限者と無限者を止揚 (aufheben) した統一者である。内的にはプロテスタント宗教精神が継承されて、キリスト者の自由を内証化し、その自由精神が具現されているとも考えられる。

同じく空海の曼荼羅の存在も絶対者であり、一般的に宇宙神を示し、大日如来の悟りの境地を具現した宇宙心理の映像に外ならない。「曼荼羅と絶対者」はともに「宇宙観や世界精神」を体系化した存在とも考えられる。両哲学は総合的であり、精神史発達の最高の立場に自己の哲学が存在するとしている。

空海の「十住心論」とヘーゲルの「精神現象学序論」発展図は、人間の精神は低次元から高次元まで発展するには、自然感情から意識化された理性へと、思惟の秩序と概念によって実在する生々しい感覚が、美とか聖とか永遠とか、宗教とかによって精神にまでたかめられる哲学が、一層信仰心によって輝き絶対化されると説明している。

三 多元的教会と一元的世界観

「神の認識は自己認識である」という命題は、空海の自性法身、即身成仏、とヘーゲルの自己意識が絶対者をめざして世界精神ま

で到る命題にもあてはまる。この神の認識が、現実的には理性的存在となり、神の知恵として国家や神学の婢女として大学が誕生したと、ヘーゲルは歴史哲学の中でのべている。それは神の知恵として、現実には国家として存在し、絶対知の具現として世界が存在すると説明している。

Der Staat ist die wannhafte Weise der Wirklichkeit : in ihm kommt der wahrhafte, sittliche Wille zur Wirklichkeit und liebt der Geist in seiner Wahrhaftigkeit.

原始キリスト教や原始仏教の倫理観は、一元的世界観で、非論理的要素で構成されているが、統一者が創始者なので超論理の宗教哲学が存在する。古代ギリシヤ即ちインド、アリヤン民族の宗教は多神教であるといわれ、ヨーロッパでは紀元後ようやくキリストによって統一されるが、世界同胞、内面的信仰、精神的救世主思想にもついた超越者の自覚による宗教が確立した。ヘーゲルはかかる「キリスト者」としての自覚の上に、内面的自由の確立を、現実の世界に、いかに確立するか、そこには東西のあらゆる哲学、宗教、芸術の思想が必要とされ、相矛盾する現実の問題を、論理的に止揚し、体系づけることに苦心した。空海も他諸派を凌駕するためにも頭教を否定して密教哲学の優越性を説いたのである。ヘーゲルの一元的世界観と空海の多元的宇宙観は「キリスト者の自由」と「毘盧舍那仏の自内証」が対照的に存在しているようである。

四 金剛智と絶対知

ヘーゲルの絶対知は自己意識を理念までたかめるために、自然意識から自由の境地にいたる神の判断とも考えられ、空海の金剛智は煩惱を能断する完成された人格的統一された判断力を意味するが、しかし両方とも「ロゴスと観照」⁽¹⁰⁾にあてはまる。

神から如何に世界が誕生するか、生命あるロゴス（自然）は自らを変化させずにつくるのであれば、即ち自己自身の中に留まって、そのロゴス自体が観照であるといえよう。観照は大日如来の自内証による金剛智によく似ている。プロティヌスは自然も魂もそして世界も美しき輝きに満ちた観ものの産出にすぎないと説明していることは、不滅の輝きを放つ金剛智も同じである。ハイデガーは「ロゴス」はドイツ語で同音のレーゲン (legen) を意味することから前に置くことを意味すると説明しているが、プロティヌスの観照によれば、美しく置かれたものと解釈しても不思議でないようだ。

五 自内証（呪文）と弁証法

ヘーゲルと空海の超論理性の認識方法は神秘的な弁証法（論理）に基づいている。「真言呪文」は否定性を内面の浄化、精神統一すること、「悟る意識」「自由意識」を得ることである。ヘーゲルは弁証法を人類二千年以来の最高の学問と喝破し、その思想を東

方から学んだとしている、このことをシチエルバトスコイが比較思想としてのべておる。「およそ学問の体系は大別して二つである。例えば大乘対小乗の値であつて、ギリシヤ哲学のパルメニデス対ヘラクレイトスに比較される。日常世界のすべての概念が、否定性の作用を受けており、その論理を著名に示しているのはヘーゲル弁証法とナーガールジュナの弁証法との間に示されている。この二人の哲学者の確言は否定性（空性）は字、宙の魂である、否定性は世界の靈魂である (Die Seele der Welt) 」。⁽¹¹⁾

ヘーゲルが間接的にナーガールジュナの弁証法や否定性を世界精神認識方法であることの影響を受けたかどうか不明であるが、空海は『顕密二教論』でナーガールジュナの弁証法を継承したとしている。ヘーゲルの論理と同じ、空海は先進的である。西田幾多郎は形而上学は弁証法によって統一されなければならないとし、真理が真理を証明するさいに、自分自身を媒介としながら、直接的に自然的存在、精神的存在、相対的存在、矛盾的存在に迫る。

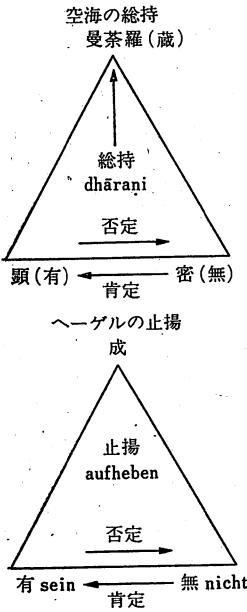
「一即多」とか、「多即一」とかに弁証法（論理）に統一されなければならない。密教では「自内証」「内証智」「即身成仏」となつて自分自身の世界に、絶対者、超越者を発見する。「自受用法仏説内証智境是名秘也、自性法身是名秘密藏亦名金剛頂大大教王」『顕密二教論』

Für sich ist die absolute Idee weil kein Übergehen noch Voraussetzen und überhaupt keine Bestimmtheit, welche

nicht flüssig und durchsichtig wäre, in ihr ist, die reine Form des Begriffs, die ihren Inhalt als sich selbst anschaunt. Enzyklopädie, 567. s.

六 総持 (dhāraṇī) と止揚 (aufheben)

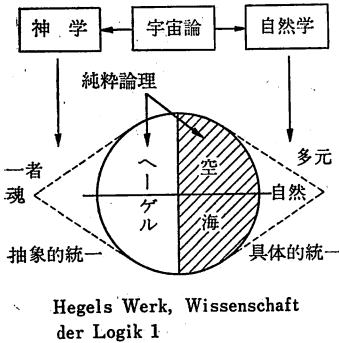
根源的には同じ意味、内容と言葉の意味からしても東洋と西洋の認識の違いや、特質が出てくる。幸いヘーゲル哲学の止揚 (Aufheben) と空海の総持 (dhāraṇī) の語源はインド・ゲルマン語族と同一系統の語の組合せから成り、相方に「所有」の意味を含む。「総持」は諸仏の所説を保持すること、精神統一によって諸仏の真理や存在を会得する方法である。「止揚」は全く相反する「有」と「無」の概念を統一して理念にまでたかめること、止揚と説明するよりも、総持の訳語が適當なくらいである。総持も止揚も、絶対者である「大日如来」や「世界精神」にいたるため、自己の世界を見つめながら、現実と理念との相矛盾する存在を保持して



いる状態、即ち「一即多」「多即一」を内容としてしている。このとは精神統一の働きを、論理的に説明したにすぎない。

七 結び

空海とヘーゲルの哲学を比較して、基本的に同じ認識に過ぎている。(一)否定の哲学による純粹論理 (科学) である、(二)弁証法思维による宗教哲学の確立、(三)東洋や西洋にのこる伝統的古代の世界観や宇宙観を体系的に説明している。この三点にまとめられるが、空海の哲学はヘーゲル哲学程、はなやかに世界思想史の舞台におどろ出ないが、近代精神の「自己の内」に光を見つけ、他者をも啓蒙する「ように」、「自己自身に大日如来の輝きを秘めている」ことは、より一層形而上学的で、自然哲学の特色が見られる。



- (1) 川崎庸之『空海』(日本思想大系) 岩波書店 一九七五年
 - (2) 山本信訳『ヘーゲル』(世界の名著) 中央公論社 昭和四十二年
 - (3) 紀平正美『日本精神とヘーゲルの弁証法』哲学雑誌第五百三十八号
 - (4) 右同書 二七頁参照
 - (5) 『三枝博音著作集』第四卷 中央公論社 昭和四十七年
 - (6) 空海『頭密』教論』年版不明
 - (7) フォイエルバッハ著、榎山欽四郎訳『将来の哲学原理』小石川書房
 - (8) 梅原猛、武内義範編『日本の仏典』中央公論社
 - (9) HEGEL, WERKE, IN 20 BÄNDEN Phänomenologie des Geistes
 - (10) 宇都宮芳明訳『マルティン・ハイデガー』理想五一二号
 - (11) 金岡秀友訳『シチエルバトスコイ大乘仏教論』理想社
 - (12) 中村元『佛教語大辞典』東京書籍 昭和五十年
- (いけはた・ひでお、哲学、秋田県立三ツ井高校教諭)